〈資料〉

銭湯･公衆浴場研究のための文献案内

公衆浴場研究家　原沢　聡志
法政大学キャリアデザイン学部教授　梅崎　修

1　はじめに

筆者らは、大学生が卒論やレポート執筆のサポートをつけてきた。原沢は、銭湯･奥の細道　（東北と全国の銭湯巡り）のホームページで銭湯の情報を公開しており、卒業論文を執筆している大学生などからの問い合わせや相談がある。また梅崎は、ゼミ活動の一環として、銭湯調査を行い、報告書を作成した（梅崎ゼミ３年報告書『「銭湯×サードプレイス」プロジェクト報告書』(2016年)）。

調査対象としての銭湯は、日本文化論、地域コミュニティ論、事業経営論、健康や well-being の研究などの様々な視角から調査・分析できるという長所がある。さらに、学生にとっては、実際に銭湯を体験しつつ、研究ができるので、調査依頼などのハードルは低い調査対象と言えよう。

その一方で、多くの若者にとって銭湯は、未体験の対象でもある。実際に、学生が卒論・レポートに銭湯を取り上げたとして、一度も銭湯に入ったことがない学生、公衆浴場とスーパー銭湯の違いがわからない学生も多いのではないだろうか。それゆえ、銭湯研究を始めるための文献を押さえておく必要がある。本稿は、主に大学生を対象とした銭湯研究のための文献を紹介することを目的としている。

ところで、本稿を書くきっかけは、原沢のもとに大学生の論文の執筆についての問い合わせが増えてきたことである。原沢は、【銭湯大学】というコンセプトで大学生による銭湯を対象にした論文・レポートの作成を支援してきた[1)]。ただし、相談数も増え、かつ研究の領域も多様になると、個別に対応することが難しくなり、その相談のために梅崎研究室を訪れた。そして、二人でどのような研究支援の方法があるかについて議論をした。その後、原沢は、「銭湯・公衆浴場研究入門／参考文献紹介」という記事をホームページに掲載した[2)]。本稿は、この記事をベースに大学生の調査研究の視点から＜資料＞として追記、改訂したものである。

2　銭湯とは何か

（1）銭湯の定義

はじめに、文献の紹介する前に「銭湯」という言葉について確認する。銭湯は、一般的に使われる言葉であるが、実際のところ「銭湯」の定義は曖昧である。文献や記事によって、その指し示す対象が変わっている。

銭湯、お風呂屋さん、公衆浴場、湯屋など時代や地域によって様々な呼び方があり、「銭湯」という言葉も日常的に使われる。レトロな建物の銭湯をイメージする人もいれば、大きなスーパー銭湯を想像する人もいる。

銭湯の第一の定義は、法律によって決められている「一般公衆浴場」である。現在は最も一般的で全国的に通用する定義である。「一般公衆浴場」は「普通公衆浴場」とも言われることもある。一般公衆浴場は、公衆浴場法によって地域住民の日

常生活において保健衛生上必要なものとして利用される施設で、物価統制令（昭和21年３月勅令第118号）によって入浴料金が統制されている。いわゆる「銭湯」の他、老人福祉センター等の浴場があると説明されている。多くの家庭に自家風呂がない時代に、保健衛生のために経営を支援される代わりに、入浴料金が統制されるようになり、現在に至る。最新の数字では、全国に公営305、私営2,815合わせて3,120軒の銭湯がある（厚生労働省『衛生行政報告例』（2022年３月））。

なお、物価統制令による入浴料金は、都道府県ごとに議論され、最終的な金額も個別に決定する。現在全国で一番高いのは、東京都と大阪府の大人520円、一番安いのが佐賀県の大人280円となっている（2023年８月現在）。ちなみに、これは「上限価格」であって「一律価格」ではない。つまり、これ以上上げることはできないが、下げるのは許可されている。ただし、実際に価格を下げている銭湯は少ないので、これを勘違いしている人は多い。また、サウナ料金等は、入浴料金とは別に自由に決定できる。

さらに詳しく説明すると、この「一般公衆浴場」は、県によって対象施設の範囲が微妙に違っている。鹿児島県のように町の小さい銭湯から大型浴場・日帰り入浴を行っているホテルまで含む範囲が非常に広い都道府県もあれば、東京のように対象範囲が狭い都道府県もある。また、現在は一般公衆浴場の新規開業が様々な理由で非常に難しい都道府県もある。

銭湯の施設設備についての基準やルールは、各都道府県や自治体の条例などで決まっており、それを読むと共通の部分もあれば違う部分もあり、全国一律ではない。この点は、研究にあたっては留意すべき事実である。

続いて、もう一つの『銭湯』の定義として、銭湯を「公衆浴場組合に入っている浴場」とする場合がある。一昔前はこの定義で書かれている文献も多かった。

各都道府県には、公衆浴場業生活衛生同業組合（以下、浴場組合）という銭湯の同業者団体があり、多くの銭湯はそこに加入して営業している。ただし、加入は任意なので、加入せずに営業している銭湯もある。なお、ここ数十年で銭湯の数が減少し、すでに浴場組合が解散している県も出てきているので、この定義だと、数量的把握から漏れてしまう銭湯が多くなる。この浴場組合に入っている銭湯の数は38都道府県で1,755軒になる。（全浴連調べ。2023年４月現在）つまり、前述した全国の一般公衆浴場の約２／３弱が、この浴場組合に加入していることになる。

東京都は、一般公衆浴場の浴場組合への加入率が全国でもトップクラスに高く、その約99％が加入している。それゆえ東京都などの都市部では、「銭湯」＝「一般公衆浴場」＝「公衆浴場組合に入っている浴場」という認識も成立する。

（２）銭湯の数量的把握

大正、昭和、平成、令和と時代は進み、人々の生活や住環境も変わり、どの家に風呂があるのが当たり前になった現代、当然のことながら銭湯の役割や立ち位置も大きく変わった。

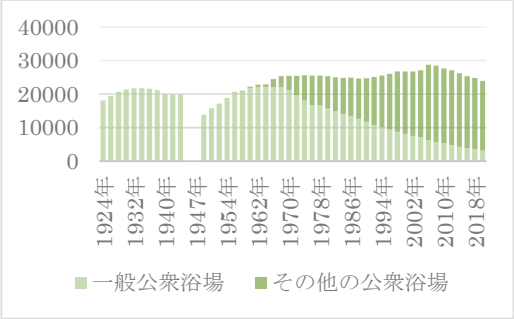
すなわち、銭湯も、「入浴という住民の日常生活において保健衛生上必要な施設」から「日々の生活のリフレッシュ、肉体的かつ精神的な疲れを癒す、余暇を楽しむ施設」へと変貌を遂げてきた。

なお、前述の「一般公衆浴場」と「その他の公衆浴場」の境界線や役割の違いも、それぞれの営業スタイルが多様化した結果、年々なくなってきていると考えられる。

ところで、「銭湯が減った」「銭湯文化がピンチ」と書かれた本や記事は多いが、これは半分正解で半分間違いである。

銭湯（一般公衆浴場）の数のピークは、太平洋戦争前後に大きく２度あった。１度目は、昭和２年（1927）頃～昭和15年（1940）頃までの十数年間であり、２度目は、昭和31年（1956）頃～昭和46年（1971）頃までの十数年間である。全国に20,000軒以上の銭湯が存在していた。

銭湯の本や記事に「銭湯のピークは、昭和43年（1968年）で全国17,999軒あった。」と書か



注）1944-1948の間はデータがない。
資料）内務省警保局『警察統計報告』厚生労働省『衛生行政報告例』を基に作成。
図１　公衆浴場数の推移（全国の軒数）

れることがあるが、これは前述した“公衆浴場組合に入っている浴場”の数のピークである。

一般公衆浴場（浴場組合加入している浴場も）は、昭和40年代後半（1970年頃）から全国的に減り続けてきたが、実は「一般公衆浴場」や「その他の公衆浴場」などを足した「公衆浴場の全体数」は減っていない。

昭和30年代までは、都市部や町を中心にまだ風呂のない家が多くあり、公衆浴場はそのほとんどが一般公衆浴場であった。ところが、時代が進むにつれ、全国で家庭の風呂普及率が急速に上がり、同時に健康ランド、サウナ、スーパー銭湯、岩盤浴など様々な温浴施設（その他の公衆浴場）が増えた。その結果、一般公衆浴場が公衆浴場全体にしめる割合も年々減少していったのである。

公衆浴場の全体数は平成に入っても増え続け、平成18年（2006）頃には全国28,000軒を越えてピークを迎えている。この流れを確認すると、銭湯の減少という指摘は、「一般公衆浴場」の減少のみを意味していると言えよう。

（3）論点

前項で確認した銭湯の数量的把握は、銭湯の多様化として理解できる。文化や歴史がある「一般公衆浴場」を狭義の銭湯と定義すれば、銭湯文化の衰退と言えるが、スーパー銭湯、日帰り温泉、サウナ、スポーツ施設なども含む「その他の公衆浴場」も含めた「広義の銭湯」を含めれば、銭湯文化の衰退ではなく多様化なのである。（ただし、近年は公衆浴場全体としてもやや減少傾向にある）。

銭湯や公衆浴場の長い歴史の中で、「銭湯」は時代と技術の進歩、人々の入浴や衛生意識の移り変わりによって多様化してきた。そして、銭湯は都道府県ごとに施設も状況も大きく違うのである。

このような多様性をどのように考察するかについては様々な論点が存在する。狭義と広義の銭湯の違い、歴史の違い、行政や法律の違い、事業経営や顧客の違い、銭湯文化の違いなどの様々な観点から分析できる。

喩えて言えば、前者が商店街、後者がショッピングモール、スーパーマーケットになる。歴史も、立地も、客層も、サービスも違っているが、共に銭湯と呼ばれ、その違いの変化を分析することが求められる。例えば、前者は徒歩で通える駅前に多いとか、利用者が高齢者や固定客が多いのに対して、後者は家族やグループが多いというような分析事例が考えられる。ただし、近年は様々な銭湯が生まれることで、このような２分類が当てはまらない事例も増えてきている。

なおこの違いは、文献の違いとも関係する。狭義の銭湯を取り上げた文献は多く、それ以外の「その他の公衆浴場」と取り上げた文献は、ガイドブックを除けば少ない。それゆえ、多様性を分析するという視点で文献を整理しながら読んでいく必要がある。

3　文献紹介

本章では銭湯に関する文献を紹介する。これらの文献は書店や古書店、Amazon、日本の古本屋などのサイトを使って購入できるかもしれない。購入できない場合は、地元や大学の図書館、県立図書館・資料館や国立国会図書館で探してみるのもよい。

とりあえず１冊読んでみて、その中で気になったテーマや対象、執筆者を見つけて、より細かい

テーマや地域を絞り込んでいったり、引用・参考文献の中で、自分の研究に関係ありそうな文献や先行研究をさらに調べてみたりするというやり方が有効である。

（1）基本文献

はじめに銭湯に対する基本的文献を紹介する。銭湯についての事前知識がない場合、これらの文献から読むことをお薦めしたい。

①中野栄三『銭湯の歴史』雄山閣 1970年

「入浴史」「浴場史」「銭湯史」「入浴雑考」の各章で構成されている。日本人の入浴の歴史、浴場形態の変遷、江戸の湯屋、明治大正時代までの銭湯の歴史、生活風俗などが取り上げられている。現在は、書名を変えて『入浴と銭湯』（雄山閣アーカイブス）として入手可能である。歴史の研究書なので、歴史学を学ぶ大学生以外は、少し難しいかもしれないが、銭湯史を理解できる基本文献である。

②山田幸一監修『いま、むかし・銭湯』株式会社 INAX 1988年

INAX ギャラリーにおける企画展「いま、むかし・銭湯」に合わせて刊行された本である。内容は、「わが国における入浴文化の変遷と浴場建築」「銭湯の建築史」「江戸の銭湯と風俗史」「銭湯経営者と新潟・北陸との関係」「銭湯の名建築」「唐破風」「ペンキ絵」など、その後の銭湯関連の本でよく取り上げられているトピックスのほとんどがここで書かれている。健康ランドの元祖「船橋ヘルスセンター」についての記述や写真も貴重である。写真が豊富なので読みやすい。

③町田忍『銭湯－「浮世の垢」も落とす庶民の社交場』ミネルヴァ書房 2016年

銭湯研究科のシリーズ・ニッポンの再発見の②として刊行された本である。銭湯の入門者に、歴史、地域性、名銭湯紹介、建築、最新動向という流れでバランスよく解説している点がこの本の魅力である。銭湯についての知識をバランスよく身に付けることができる。

④社団法人　日本銭湯文化協会編『銭湯検定公式テキスト』草隆社 2009年

浴場組合が刊行している銭湯検定の公式テキストである。江戸時代から現代に至るまで、銭湯の歴史や文化、日本人の銭湯・入浴事情を幅広く解説している。銭湯の建築や雑学、データについても書かれている。2020年に改訂版が刊行された（全２巻）。第１巻では銭湯の「歴史」「建築」「雑学」、第２巻では銭湯入浴医学や健康法が書かれている。

（2）文書資料

次に、研究のための「資料・データ」として使える文書資料を紹介したい。これらの文献は、古書として購入するには高価なものが多いので、図書館などで探してみることをお薦めする。

①公衆浴場史編纂委員会編『公衆浴場史』全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会　1972年

浴場組合の記念事業として監修者の武田勝蔵氏を中心にまとめられた本である。銭湯や公衆浴場研究の基礎となる史料である。銭湯関連の書籍などに載っている銭湯の歴史や知識はこの本に由来するものが多い。付録として、図書目録と 672年以降の公衆浴場史略年表がついている。なお、武田氏には、日本人の入浴の歴史について説明した単著、『風呂と湯の話』（はなわ新書、1967年）がある。

②東京都公衆浴場商業協同組合『30年のあゆみ』東京都公衆浴場商業協同組合 1980年

公衆浴場組合の資料は、外部に公開されていることは少ないが、本書は貴重な歴史資料である。まとまった年史･記録は、東京のほかにも、北海道、札幌、旭川、埼玉、板橋、墨田、池袋、新宿、大阪、京都などの資料も存在する。その他にも、一般利用者向けの銭湯マップや組合員向けの名簿を

作られていることもある。このような情報を使って再分析することができるかもしれない。古書店にもなかなか探すことはできない。図書館や国会図書館を探してみると良い。

③全国公衆浴場業環境衛生同業組合『全浴連三十年史』全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会 1990年

発行された部数が少ないせいか、収蔵している図書館が少ないが、史料的価値は非常に高い。内容は大きく分けて公衆浴場の歴史を江戸時代から昭和63年まで年表でたどる「全浴連のあゆみ」と、北海道から沖縄まで各県の動きや入浴料金、軒数などの変遷が書かれている「各都道府県の浴場組合のあゆみ」がある。昭和期の浴場組合の動き、公衆浴場法や入浴料金など、銭湯と行政との交渉の過程などが非常に詳しい。ちなみに、この20年後に出た『全浴連50年－来し方から展望へ』（2008年）は、この本に比べると情報量が少ない。

④全国公衆浴場業生活衛生同業組合連合会『全国浴場新聞』1969－2023年（現在）

銭湯の業界紙である。現在も毎月発行され全国の銭湯に配布されている。浴場組合の会議の内容や人事や入浴料金、コラム、歴史、広告など銭湯関連の記事が多数掲載されている。それらをまとめた『全国浴場新聞縮小版』（自1969年年8月－至1997年12月　創刊号－341号）も刊行されている。

現在、『全国浴場新聞（電子版）』がインターネットで公開されていて、1969年から2019年までの全ての記事が誰でも読める。記事の単語検索機能もついているので、便利である[3)]。1969年以前は、『全日本浴場新聞』という名称で発行されていた時期もある。

⑤京都市社会課『京都市社会課叢書第13編 京都の湯屋』1924年

大正13年に京都市が行った市内の湯屋（銭湯）への大規模な実態調査の結果をまとめたものである。この時代の銭湯に関する一次史料はとても貴重である。当時の湯屋の建物、設備、経営状態、従業員などかなり詳しい情報が載っている。また、京都の銭湯の歴史や浴場の衛生調査、寺院の古浴室設備、京都市公設浴場の概要なども書かれている。【『日本近代都市社会調査資料集成4　京都市・府社会調査報告書Ⅰ　11　大正13年（1）』近現代資料刊行会,2001年】にそのまま収録されているので、こちらで見ると良い。

⑥公衆浴場史編纂委員会『公衆浴場史略年表稿本』全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会 1969年

『明治以前』『自明治元年至昭和四十三年」の2冊がある。全国の浴場組合より提供された資料、東京の本部所蔵のものを「史料カード」を数千枚にして採集し、整理しもののである。前述した『公衆浴場史』にもこの年表の抜粋したものが収録されているが、本書の方が内容はより詳しい。

⑦神保五弥『浮世風呂　江戸の銭湯』毎日新聞社 1977年

江戸時代に書かれた文学作品の記述を中心に江戸の銭湯を考察した一冊である。伊勢与一から始まる江戸時代の銭湯の発展、当時の銭湯の構造や経営、客と銭湯で働く人、銭湯の一日、銭湯の四季などについて書かれてある。当時の銭湯を描いた絵も多く載っている。

⑧東京都公衆浴場業環境衛生同業組合『東京銭湯物語』草隆社 2000年

本書は、「東京の公衆浴場の歴史」「風呂屋の主人が語るあのころ」「銭湯写真館」「銭湯で元気になる」によって構成されている。コンパクトながら、非常によくまとまっていて読みやすい書籍である。貴重な写真や銭湯に関する記述も多くある。

⑨星野剛『湯屋番五十年　銭湯その世界』草隆社　2006年

墨田区のさくら湯のご主人が自らの修業時代を

振り返り、時代背景とともに当時の銭湯の模様を描いた昭和銭湯回顧録である。終戦直後の銭湯の状況とその仕事内容や従業員構成、他の銭湯の関係など非常に分かりやすく書かれてある。同著者には、エッセイ集の『風呂屋のオヤジの番台日記』（草隆社 ,1999年）もある。

⑩笠原五夫『東京銭湯三国志』文芸社 2010年

⑨で紹介した『湯屋番五十年　銭湯その世界』と同じように、新宿松の湯主人が、銭湯文化、ご自身の経験史を記している。銭湯情報誌『1010』に連載をしていた内容が含まれる。本書の中では笠原氏が書いた銭湯の絵も載せられており、貴重な資料といえる。氏は、東京浴場組合の「銭湯文化展」にも出展しており、画集である『絵でみるニッポン銭湯文化』（ 里文出版 ,2016年）も刊行している。

⑪横浜開港資料館・横浜歴史博物館『銭湯と横浜』横浜市ふるさと歴史財団 2018年

2018年に横浜で行われた「銭湯と横浜」展に合わせて作られた本である。横浜を中心に、銭湯について多方面から研究され、その内容も非常に充実している。写真も多く、資料価値が高い。さらに、本書後半の浴場史研究や参考文献の数々は参考になる。銭湯経営者と北陸の関係についての研究も含まれる。

⑫厚生労働省『今日から実践！　収益力の向上に向けた取組みのヒント　公衆浴場業編』厚生労働省 2019年

⑬新倉貴士監修『消費者行動論で読み解く　銭湯の常連を増やす方法』全国公衆浴場業生活衛生同業組合連合会 2023年

⑫⑬ともに、銭湯経営者向けに作られたものだが、銭湯経営や利用者の実態・動向を知る資料としては貴重である。また、ともにPDF版がネットから容易に入手できる[4)]。

前者は、業界動向、消費者動向、経営改善のヒント、取り組み事例などが紹介されている。その後も同様の冊子が継続的に刊行されている。後者は、老若男女へのネットアンケートから、銭湯の利用状況、銭湯に求めること・設備、利用（または止めた）のきっかけなどが載っている。経営学の観点から銭湯を研究したい学生には、役立つ報告書と言える。

⑭『東京都公衆浴場対策協議会』（各年度）

各都道府県の行政と公衆浴場事業者、学識経験者で行われている入浴料金などを決める会議である。他府県では「公衆浴場入浴料金審議会」などの名称で行われていることもある。入浴料金の他に、様々な銭湯に対する施策などが話し合われる。銭湯の軒数や経営状況などの資料が会議に使われて、議事録や会議資料がWEB公開されている県もある。その都道府県ごとの銭湯の実情の一部が知ることができる。

⑮厚生労働省『衛生行政報告例』（各年度）

全国や各都道府県の銭湯の数（公衆浴場数）の変遷は、厚生労働省が毎年公表している『衛生行政報告例』によって1949（昭和24）年から現在まで公営及び私営別の公衆浴場数を種類別に把握できる。なお、戦前については『警察統計報告』に全国の公衆浴場数のデータが載っている。

⑯「浴場業の振興指針」（厚生労働省）

「浴場業の振興指針」とは、厚生労働省が定めた法律に準ずる銭湯（公衆浴場）業界の指針である。その内容は、５年に１回改定され、厚生労働省の会議で銭湯経営者代表も参加し内容を決めている。最新版は、2020年３月に発表されている。これを決める厚生労働省の厚生科学審議会（生活衛生適正化分科会）の資料や議事録も重要である。銭湯業界の現状や業界が抱えている課題や問題点にも触れている。

（３）銭湯・公衆浴場の研究

銭湯に関する研究論文は様々な研究領域で増えてきている。書籍と比べると、学術雑誌に掲載さ

れている論文を探すのは、CiNii などの学情報検索を使いこなす必要がある。学術論文では、研究手法や理論を注目しながら学術論文に挑戦することをお薦めする。

なお、本稿の執筆途中で藤島人時（2023）「公衆浴場研究の動向と課題」『常盤台人間文化論叢』（第9巻第1号、pp.33-52）が刊行された。この論文は、銭湯（公衆浴場）に関する先行研究の動向を整理し、今後の研究の方向性を展望した文献であり、銭湯・公衆浴場の研究の参考になる。その内容は、大学院生や研究者による学術論文の執筆が想定されている。

①宮崎良美「石川県南加賀地方出身者の業種特化と同郷団体の変容－大阪府の公衆浴場業者を事例として」『人文地理』第50巻 第4号 1998年 pp. 396-412

②湯浅俊郎（1999）「都市同郷団体の生成と変容―石川県小松市、加賀市出身者を事例にして」『同志社社会学研究』第3号 pp. 41-64

一般的に「東京や関西の銭湯経営者には北陸出身者が多い」と言われる。①②は、北陸出身者たちの都市同郷団体の形成に調査の焦点を当てている。なぜ、特定の地域の出身者が公衆浴場業に進出していったのかという問いに対して、銭湯の歴史や県人会・同郷団体、親族や友人などの「つて」、資金や物件、就職先の紹介の繋がりなどの多方面から考察している。

③柴田恵介「銭湯にみる地域外出身者と地域社会の変遷」『京都の門前町と地域の自立（龍谷大学社会科学研究所叢書　第76巻）』晃洋書房 2007年

行政や浴場組合に残っている記録や京都市下京区の銭湯へのインタビューをもとに、京都における過去、最盛期、現在に至る銭湯の歴史を記述している。その中で、北陸を中心とした他地域出身者が、銭湯という場所を通して地域に受け入れられていく過程や銭湯での働き方や運営状況の変化、同業者間の繋がりなどが丁寧に調べられている。また、比較対象として、京都タワー大浴場の記述もある。

④西澤晃彦（2000）「東京の銭湯－思想としてのアーバニズムの一形態」『現代思想』現代思想 第28巻第11号 pp.80-93

都市社会学を専門とする筆者が、グローバルシティとなった東京における銭湯利用者の多国籍化について考察している。銭湯に中心にしたコミュニティに対しては、銭湯を舞台にした漫画やドラマなどの文化的コンテンツの影響もあり、一面的なイメージを持ってしまう。例えば「下町の人情」という側面を強調してしまうと、銭湯利用者の多様性を見落としてしまう。グローバルシティである東京の銭湯で、どのような多文化コミュニケーションが生まれるのか。多文化共生社会論に関心がある学生にはお薦めの研究である。

⑤白石太良「生活文化の舞台としての公衆浴場の現状－神戸と明石における調査から」『御影史学研究会民俗学叢書16　民俗宗教の生成と変容』岩田書院 2004年

この論文は、2002年にゼミの学生とともに神戸市と明石市の全ての銭湯に実際に入浴して調査を行ってまとめられた論文である。公衆浴場の実態（概況、施設と設備、清掃の状況など）、入浴客の動向（利用頻度、家庭風呂の有無、入浴時間や方法など）、公衆浴場の問題点などが書かれている。大学生も参加している調査なので、大学生に参考になるであろう。

⑥川端美季『近代日本の公衆浴場運動』法政大学出版局 2016年

江戸・明治・大正期の都市の公衆浴場、特に「公設浴場」に関する研究書である。湯屋の法規則の変遷や欧米の公衆浴場運動、行政の社会事業としての公衆浴場、大阪、京都、東京での「公設浴場」が紹介され、労働者の生活環境改善、部落改善事業、大火や関東大震災との関連について分析されている。

⑦佐藤せり佳「銭湯の行動学」菅原和孝編『フィールドワークへの挑戦－＜実践＞人類学入門』世界思想社 2006年

銭湯の女湯で起こる客同士のつながりや銭湯を中心としたコミュニティを、筆者が銭湯に通い詰めるという参与観察で調べあげた論文である。共有時間、背中の洗いっことお気に入りの場所をめぐる調整などの行動を発見し、常連客がつくるコミュニティを分析している。

なお、この論文の調査は、佐藤氏が大学２年の時の社会人類学調査演習に始まる。その後卒業論文としてまとめられた。ここまでの研究価値の高い論文が大学生が行なった調査によって生まれたことを知ることは、多くの大学生が励まされるであろう。

⑧中山満美、辻原万規彦、細井昭憲、安浪夕佳「地方都市における一般公衆浴場の変容に関する研究」『日本建築学会技術報告集　第13巻26号』2007年

熊本市の銭湯（一般公衆浴場）の建物、経営、設備、客数など多方面からその変遷を考察している。建築領域においける調査なので、銭湯の実測図、写真なども入っている。それだけでなく、聞き取りによって経営者同士の関係も分析している。

⑨木藤伸一朗「公衆浴場と法」『立命館法学』第５・６号（第321・322号）2008年

現在も残っている公衆浴場に対する「距離制限をともなう許可制」と「物価統制令に基づく料金規制」という問題について、法と行政、過去の裁判の判例､法的視点をもとに考察している。また、強力な規制が残っているのが公衆浴場について、現代の実情と合わなくなっていること、公衆浴場確保という観点から今後の課題が多い点などを指摘している。

⑩石井萌美、川原晋「生活文化資源としての銭湯継承とレクリエーションを含む新規需要獲得の取り組み－親族以外が事業継承した銭湯に着目して」『日本観光研究学会機関誌　Vol.33』2021年

親族以外が事業承継した全国の銭湯の十数軒を１軒ずつ聞き取りや現地調査した論文である。いま注目されている銭湯の事業継承の現状と課題について、詳しく分析されている。原沢が作成をお手伝いした学生の論文である。

（４）一般向け書籍

一般向けの銭湯本は、銭湯の建物や装飾、タイルなどに注目したものが多く、写真が豊富なのが特徴である。あくまで銭湯の紹介や魅力､面白さ、ノスタルジーなどを伝える本なので、魅力的な銭湯が中心的に紹介されるという偏りがある点には注意を要する。もちろん、銭湯に興味を持つきっかけとしてはよい。また、娯楽や観光の視点から銭湯を分析したい人によっては、資料として読むこともできる。多数が出版されている中で、おすすめのものを何冊かピックアップした。

①町田忍　編著『銭湯へ行こう』TOTO出版 1992年

②町田忍　『銭湯へ行こう・旅情編 10年1089軒行脚の記録 カラー版』TOTO出版 1993年

町田忍氏に関しては、現在にいたるまで多数の銭湯本を出版している。ただし、いくつかの書籍は、内容が重なる部分がある。基本文献で紹介した『銭湯―「浮世の垢」も落とす庶民の社交場』を読んで学生が、さらにもう一歩読みたい本として、上記の２冊がお薦めする。この２冊がその後の町田氏の銭湯本のひな型とも言える。

③塚田敏信『いらっしゃい北の銭湯』北海道新聞社　1998年

著者は当時高校教諭で学生と銭湯の自主製作本なども作っていた方である。カラー写真豊富に、約40軒以上の北の銭湯をそれぞれ魅力的に紹介している。銭湯の建物や煙突、看板、のれん、番台、タイルなどの解説や写真も多数あり。巻末に当時の北海道の銭湯リストも収録されている。

④松本康治『関西のレトロ銭湯』戎光祥出版 2009年

関西のレトロ（激渋）銭湯を、建物や入浴風景を写真豊富に40軒ほど紹介している。近年は、銭湯一軒ごとの紹介とともに、「銭湯と旅」というテーマで紀行文的なものも多く、文章もおもしろい。『レトロ銭湯へようこそ』『旅先銭湯』など、関西・西日本の銭湯の本を多数出版しているので、気になったものを手に取ってみてはどうだろうか。

⑤林宏樹『京都極楽銭湯読本』淡交社 2011年

前作の『京都極楽銭湯』は京都の銭湯を一軒ずつ紹介した銭湯ガイドブックであったが、本書は京都の銭湯を、建物、設備、タイル、ドリンク、屋号、祭り、イベント、データなど多方面から読み解く一冊になっている。写真やレイアウト等もきれいでとても読みやすい。

⑥大武千明『ひつじの京都銭湯図鑑』創元社 2016年

京都のおススメ銭湯の17軒を外観、内観、間取り図や建物設備の特徴とともに紹介している。写真ではなく手書きカラーの間取り図やイラストがかわいく、コラムやミニ漫画も面白い。著者の銭湯への愛情や思いが感じられる一冊である。

⑦早坂信哉『最高の入浴法－お風呂研究20年、３万人を調査した医者が考案』大和書房 2018年

本書は、入浴全般に関する文献なので、銭湯だけに当てはまる研究ではない。その一方で、入浴に関して医学的見地から研究を行っている著作は他の文献とは異なる情報を与えてくる。幸福（Well-being）の研究領域で銭湯の価値を見直すことも重要である。

⑧ステファニー・コロイン『銭湯は、小さな美術館』雲プロダクション （編集） 啓文社書房 2017年

日本の大学への留学をきっかけに銭湯に出会い、現在は全国の銭湯を巡る銭湯大使になったフランス出身のステファニー氏の著作である。本書の特徴は、伝統的な銭湯を美術館と見立てて、日本文化や美意識を発見している点である。外国人から日本の銭湯がどのように見えたのかを知ることは、日本生まれの学生にも新鮮な発見を与えるであろう。多文化の視点から日本文化を考えたい学生は、著者の視点を知ることは役立つであろう。同著者には、『フランス女子の東京銭湯めぐり』（ジービー ,2018年）もある。

⑨今井健太郎『銭湯空間』KADOKAWA 2020年

現在、全国で多数の銭湯や温浴施設のリニューアルを手掛けている銭湯建築士・今井健太郎氏の著書である。今井氏が手掛けた銭湯の写真や解説が載っている。本の後半に載っている銭湯の歴史の年表がコンパクトで理解しやすい。

なお、今井健太郎／銭湯空間 note[5)] には、本書に入らなかったタイルの話や2000年以降の銭湯について書かれた記事も載っている。

⑩おしどり浴場組合『銭湯　文化的大解剖！ まちのお風呂屋さん探訪』神戸新聞総合出版センター 2021年

関西の銭湯紹介や、お風呂屋さんの一日に密着、インタビュー、銭湯の見方解説などで構成されており、一つ一つが魅力的である。ただし、複数の執筆者が書いているので、それぞれの記事に統一感はない。読みたいところから読めばよい。それまであまり注目されなかった電気風呂にスポットをあてた「電気風呂の世界」は、銭湯史において必読と言えよう。

4　これからの銭湯・公衆浴場研究のために

本稿では、銭湯・公衆浴場を対象に研究したい学生向けに文献を紹介してきた。第１節でも述べたように、多くの学生にとっては未経験の対象で

あるが、その存在は、多くの文化的コンテンツなどによって「身近な知識」でもある。つまり、知識としての身近さから関心持つことも多いが、実際にその実態を知るためには、文献読解をはじめに詳細な調査・研究が必要となる。

もちろん、銭湯への関心から始まり、様々な文献を自力で探索して研究成果をまとめてほしいという気持ちもあるが、筆者らが思うのは、あまりにも学生時間は短く、卒業論文であっても、中途半端な文献読解で終ってしまうことも多いという事実である。そこで本稿は、学生に向けて執筆された。我々は、文献を読むための案内として本稿を利用し、この案内で終るのではなく、そのからさらに一歩、深い調査へと踏み出してほしいと考えている。これからの銭湯・公衆浴場研究を担うには、この資料を読んだあなたたちかもしれないのである。

注

1） http://1010meguri.blog.fc2.com/（最終閲覧日2023年8月5日）。
2） http://1010meguri.blog.fc2.com/blog-entry-385.html（最終閲覧日2023年8月5日）。
3） http://zenyoku-shimbun.org/（最終閲覧日2023年8月5日）。
4） https://www.mhlw.go.jp/content/000505173.pdf（最終閲覧日2023年8月17日）。
https://1010.or.jp/zenyoku/booklet/2023_niikura.pdf（最終閲覧日2023年8月17日）
5） https://note.com/kentaro88imai/（最終閲覧日2023年8月17日）

Bibliography for University Students Conducting Research on Sento and Public Bathhouses.

HARASAWA Satoshi
UMEZAKI Osamu

The aim of this study is to introduce useful literature for university students who will conduct research on public bathhouses (known as “sentoes”) for their graduation theses or reports. While sentoes are often depicted in comic books and TV dramas, many students lack firsthand experience with them. Consequently, even if a college student possesses an interest in sentoes and desires to delve into them for a thesis or report, the research process can be quite demanding. This study aims to provide essential support to university students by offerings curated bibliography of sentoes research. Our aspiration is that this bibliography guide will serve as a compass for students as they navigate new scholarly works and embark on their own journeys.